



Title	野生の齧歯類Millardia meltadaからの株細胞の樹立 及び腫瘍ウイルス学的検索
Author(s)	杉山, 治夫
Citation	大阪大学, 1979, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/32150
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名・(本籍)	すぎ やま はる お 杉 山 治 夫
学 位 の 種 類	医 学 博 士
学 位 記 番 号	第 4 5 6 3 号
学位授与の日付	昭 和 54 年 3 月 24 日
学位授与の要件	医学研究科 病理系専攻 学位規則第 5 条第 1 項該当
学 位 論 文 題 目	野生の齧歯類 <i>Millardia meltada</i> からの株細胞の樹立及び腫瘍ウイルス学的検索
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 豊島久真男 (副査) 教 授 川俣 順一 教 授 高橋 理明

論 文 内 容 の 要 旨

〔目 的〕

Millardia はつい最近インドで捕獲された野生の齧歯類であり、体格はマウスとラットの間で新種実験動物として有望であるが、どちらにより近縁かは全く不明である。もちろん、腫瘍ウイルス学的知見は全く得られていない。そこで、株細胞を樹立し、細胞内在性ウイルスの検索及び腫瘍ウイルス学的特徴を明らかにし、癌研究に対するこの株細胞の有用性を検討した。

〔方法並びに成績〕

- (1) 4種の株細胞の樹立：*Millardia* の胎児を小さく切り、トリプシンで単一細胞にして培養を開始した。培養開始6カ月後、よく増殖する株細胞が樹立され、MM-Dと名づけた。またMM-Dにマウス肉腫ウイルス Kirsten 株を感染させて、MM-CL 4株細胞を樹立した。一方、*Millardia* 胎児線維芽細胞にSV40を感染させて、MM-8、MM-663株細胞を樹立した。これら4つの株細胞の染色体は*Millardia* の染色体の特徴をもっており、株細胞は*Millardia* 由来であることが確認された。
- (2) 樹立された株細胞の成長曲線及び軟寒天中でのコロニー形成能：血清中の細胞分裂促進因子を除いた conditioned medium で各株細胞を培養した。MM-Dの saturation density (cells/cm²) が非常に低いのに比し、他の株細胞は、MM-Dのその10～15倍の高い density を示した。なお、MM-Dのみが contact inhibition を示した。MM-Dは軟寒天中ではコロニーを形成できなかったが、他の株細胞はコロニーを形成し、トランスフォーム細胞の特徴を示した。
- (3) 細胞内在性ウイルスの検索：*Millardia* の胎児線維芽細胞及びMM-8、MM-663をIdU, BrdU

及びcyclohexamide で処理したが、内在性ウイルスを検出できなかった。そこで、現在最も感度の高い内在性ウイルスの検出方法と考えられている non-producer (NP) 細胞に inducer を処理し、誘発された内在性ウイルスによる肉腫ウイルスの rescue を見る方法を用いた。NP細胞である MM-CL 4 に IdU や BrdU を処理し、SC-1, mink あるいは millardia 細胞と約 5 週間混合培養したが、培養上清からは肉腫ウイルスを検出できなかった。また infectious center assay として、MM-CL 4 に IdU を処理した後、マイトマイシン C で細胞分裂を止め、この細胞上に SC-1, mink あるいは MM-D 細胞をまき込んだが、focus は形成されず、マウス肉腫ウイルスの放出が検出されなかった。なお、対照に用いた Kirsten ネズミ肉腫ウイルスでトランスフォームした BALB/3 T3 の NP 細胞からは、上記のいずれの方法でも肉腫ウイルスを検出し得た。

- (4) Moloney マウス白血病ウイルスやラット内在性ウイルスゲノムに相補的な DNA (cDNA) を用いた Millardia 細胞 DNA の検索：Moloney マウス白血病ウイルスやラット内在性ウイルスのゲノム RNA に相補的な DNA (cDNA) を in vitro で合成した。これら 2 種の cDNA は、Millardia 細胞の DNA とはハイブリッドを形成しなかった。よって、Millardia の細胞 DNA 中には、Moloney マウス白血病ウイルスやラット内在性ウイルスのウイルスゲノムと相似な塩基配列が存在しないことが示唆され、Moloney マウス白血病ウイルスやラット内在性ウイルスに類似な内在性ウイルスは、Millardia 細胞 DNA 中には存在しないことが推測された。
- (5) Ecotropic, Xenotropic 及び Amphotropic マウス肉腫ウイルスに対する MM-D 株細胞の感受性：MM-D 細胞に上記 3 種の肉腫ウイルスを感染させたが、非常に低い感受性しか示さなかった。
- (6) Millardia 細胞の Moloney マウス白血病ウイルスに対する低感受性及びその原因の探究：Moloney マウス白血病ウイルスに対して、MM-D 及び MM-CL 4 は非常に低い感受性しか示さなかった。そこで、この低感受性は、virus particle の細胞内への penetration 過程の阻害によるのか否かを調べた。マウス白血病ウイルスを感染させてから 12 時間後、細胞をつぶして Hirt の方法で低分子の DNA 分画のみを集め、この分画中の unintegrated proviral DNA を、この白血病ウイルスの cDNA を用いて検出を試みたが少量の viral DNA しか検出できなかった。このことより、これらの細胞が低感受性を示すのは、virus penetration 過程の阻害が一因であることが示唆された。

〔総括〕

- (1) 野性の齧歯類 Millardia melomys より 4 種の株細胞を樹立した。
- (2) これらの細胞からは、細胞内在性ウイルスを検出できなかった。
- (3) Millardia の細胞 DNA 中には、Moloney マウス白血病ウイルスやラット内在性ウイルスゲノムと相似な塩基配列が存在しなかった。
- (4) Millardia 細胞は、Ecotropic, Xenotropic 及び、Amphotropic マウス肉腫ウイルスに対して低感受性であった。
- (5) Millardia 細胞の Ecotropic マウス白血病ウイルスに対する低感受性の一因は、virus の細胞

内への penetration の阻害であることが示唆された。

論文の審査結果の要旨

Millardia は、最近インドで捕獲された野生の齧歯類であり、体格はマウスとラットの間で、新種実験動物として有望であるが、どちらにより近縁かは全く不明で、もちろん、腫瘍ウイルス学的知見は、全く得られていない。そこで、本論文では、millardia より株細胞を樹立し、細胞内在性ウイルスの検索および腫瘍ウイルス学的特徴を明らかにした。

接触阻止がよくかかる正常型の細胞は、従来からガン研究に重用されている 3 T 3 細胞に比べうる性質と、それを上回る安定性があり、他のトランスフォームした細胞株とともに、ガン研究に役立つものと期待される。